
スーラシア王国戦記

4423

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーラシア王国戦記

【Nコード】

N2747Y

【作者名】

4423

【あらすじ】

ごく普通の日本人、三条翔は死期を悟った。なぜかって、トラックが自分めがけて突っ込んできたからだ。そして死んでしまった。そして目が覚めたら・・・赤ん坊になっていた！！。

不幸なことに死んでしまった主人公が魔法のあるファンタジーてきな世界に転生しがんばる話。

第1話 誕生（前書き）

初投稿です。誤字脱字などがあるかも知れませんが、温かい目で
見守ってください。

第1話 誕生

俺、三条翔は終わっ たなと思った。トラックが自分めがけて突っ込んできたからだ。 「今思えば短い人生だったな」

体に衝撃が走った。そして・・・。

「オギヤ

アオギヤアオギヤアオギヤアオギヤアオギヤアオギヤア

あれ？生きてるぞ。俺死んだんじゃないのか？それにしてもおれはなぜ泣いている？

「産まれましたよ！元気な男の子様です」

「でかしたぞエルザ！！これ

で我がブラシア公爵家も安泰だ」

「ところであなた、この子の名前はライトというのはどうですか」 「いい名前だ！この

子の名前はライト、ライト・ブラシアだ！！」

何の話をしているんだ？というかだんだん眠くなってきた・・・。

こんにちは。三条翔です。ここはどうやら地球とは別の世界に転生したようです。なぜそんなことがわかるかって？月が2つあるのと、俺の両親の会話からここの世界には魔法があるということがわかったからだ。魔法と聞いて俺は両親に教えてくれと頼み込んだがだめだった。普通は10歳からだからそうだ。それでも俺はあきらめ切れなくてねばったら、5歳になったら教えてくれるように約束することに成功した。ここの世界での俺の

容姿は金髪で、顔はかなり整っているから、将来かなりのイケメンになると思う。俺の家は公爵家というだけ広く使用人が多く金持ちだ。この家に生まれてよかったと思う。 ちょうどその時ドアがあいた。

「坊ちゃん、公爵様がお呼びですよ。」

「そうい

ったのは俺専属メイド、エルシアだ。前に年を聞いたらすごい顔で怒られた。どうやら女性に年を聞くのは失礼なことらしい。

「はい。今行くよ。」

たぶん前に頼んだ、書庫のことについてだろう。ここの世界の字はすでに覚えることができたので、難しい本を読みたくなくなってきたからだ。生前の趣味は読書だったからね。 そうこうしている

うちに父上のいる書斎に着いた。

「父上ライトです。入ってもよろしいですか」

「ああ。」

ここで父上の説明をしておこう。名前はネルソン・ブラシアといい、ブラシア公爵領の領主だ。無口だけど優しい俺の父親だ。あとから聞いた話だけれど、ものすごくつよいらしく、魔法で津波を作って敵軍3万をあらいながしたそうだ。それで王宮から授けられた2つ名は、大津波のネルソン。今は知らない人はいないそうだ。

「ライト。お前はもう

字を読めるようになったのか？まだ3歳なのにか？」

「はい。難しい字はまだ読めませんが絵本はすべて読んでしまいました。もっと難しい本を読みたいので書庫に行く許可をください。」

「ふむ。まあいいだろう。明日から自由に

書庫に入っていいぞ。だがお前専属メイドといっしよに入るといっう条件付だがそれでもいいか？」

「はい。ありがとうございます。」

やった！。これで明日からこの世界のことを調べられるぞ。明日が楽しみだな。

第1話 誕生（後書き）

こんなものをよんでくれてありがとうございます。次回はライト君の世界について詳しい説明を設けます。

第二話 書庫にて

昨日、父上に書庫に入る許可を得た俺は朝早くからエルシアといっしょに書庫に向かっていました。「本当にライト様はすごいですね」

本当に尊敬したような声でいうエルシア。

「ん？なんでだい？僕何かしたっけ？」

「だってライト様は3歳なのに字が読めるですよ。私なんか絵本でも大変なくらいなのに。」
「え？。なんで読めないの？」

「当たり前じゃないですか。私は平民ですよ。多少字が読めるだけいいほうです。」
ふーん。ここは教育が行き届いていないのか……。いつか学校でも建てるように父上に進言してみようかな。

そうこうし

ているうちに、書庫にたどり着いた。

「あれ？ドアの鍵が開いてる。まあいいか。
開けますよ。ライト様。」
ギーっ

と音を立ててドアが開いた。

「うわぁー」

俺は

思わず声を上げてしまった。さすがは公爵家、ものすごい大きさと本の量だな。

「すごいですねえ、ライト様。ん？

あれは……。奥様！！」

「母上！！」

「あら。ライトも本を読みに？。

やっぱり私とネルソンの子だわ。」

そういったの、エルザ・ブラシア俺の母親だ。かなりの天然だが、

どうやら父上が頭の上から数少ない人だそうだ。

「はい。本を読みにきました。」

「えらいわね。将来が楽し

みだわ。私には気にせず読んでね」

「はい。」

さて何を読もう。やつ

ぱり地理からかな。よし、地理からにしよう。うーん、どれがいいかな。まあいいやこれにしよう。

「じゃあこれを読むから

エルシアは終わるまで待つてくれないか」

「はい、わか

りました。」

さて、ついでに俺が今この時点知っている地理について話そう。我がブラシア公爵家はスーラシア王国と国に属している、それだけだ。ほかに宿敵レサロゴ皇国や、同盟国のレッサ王国、スーラシア王国の国教のラミア教の総本山、神聖ラミア皇国などの国を知っているだけだ。結構知っているじゃないかと思うかも知れないが、自分の国がどの位置にあるのかさえ知らないのだからかなり重症だ。さーて読むか。

私、エレミアです。ライト様に待っていてくれといわれたけどどうしよう……。そうだ!!失礼ながらライト様でも観察しようかしら。それにしてもライト様ってイケメンよね……。将来、絶対女の子にもてると思うわ。そうこうしているうちにもう自分の世界に入り込んでいるわね……。

10分経過

エレミアはずっとライトの顔を見てい

た。

30分経過

エレミアは多少体を動かしながらもライトの顔をみていた。

1時間経過 エレミアはあくびをした。

1時間3

0分経過 エレミアはうつとし始めた。

そして・・・。

「ふう。」

地理は、だいたいわかったな。簡単にまとめると・・・。

1スーラシア王国はフォード大陸の上空のスーラシア島などからなる浮遊列島からできている。字のごとく浮いている。

2浮いているために攻められにくく、大量の飛空艇を持っているため軍事力の面では世界有数だが、高所にあるため作物の自給率が悲惨なことになっている。

3フォード大陸に領土をもっているが、それでも食物自給率は30%程度である。 4魔法先進国で、魔石やマジックアイテムや魔法の秘薬が主な輸出品である。

5ほかにも牧畜が盛んだったりする。 6レサロゴ皇国というかそれくらいしかやることがない。 7レッサは海運の国で大量の富を稼いでいるが食料自給率はスーラシア王国と同じ悩みをもっている。

王国は魔法後進国でスーラシア王国の商売客。

こんな感じ。

そ

ろそろ遅くなってきたから帰ろっかな。

「エレシア。」

ん？返事がないな……。って寝てるな……。エレシアはこうして至近距離からみるとかなりかわいいな。むっ胸も結構大きい……。っていかんこんなことを3歳児が考えては。まずはエレシアを起こさなくては。

「エレシア起きて。」

「ふえ？」

「ほら早く起きて。」

「あっライト様。すみません」

「行こう。エレシ

ア。」

「はい。」

明日はなにを

読もうかな。

第二話 書庫にて（後書き）

次回はいつきに5歳になります。次回もよろしくお願いします。

第3話 魔法訓練く契約

俺はこの日を待ちわびていた。そう！今日は俺の5歳の誕生日。魔法が習える日だ。 「ライト様。公爵様がお呼びです。」

そういつてエレシアが入ってきた。

「ああ。今行くよ。」

楽しみだな。

「失礼します。父上。」

「ああ。ライト。」

この方が今日からお前に魔法を教えてくれるニーズ殿だ。ついでに乗馬と剣術もおしえてもらえ。」

「え？乗馬と

剣術もですか？」

「ああ。乗馬は5歳からやるものだからな。

剣術は・・・ついだ。」

「初め

まして、ライト様。私の名前はニーズ・ボルベック今日からあなたの講師です。できればボルベック先生と呼んでくださればうれしいです。」

こちらこそ初めましてボルベック先生。これからよろしく願います。」 「ではさっそくはじめましょう。

危険ですので庭に移動します。」

移動中

「ところでライト様。魔法についてどれくらい知っています

か?。」

「はい。魔法使いはランク0〜9に分類され、ランク0は非魔法使い、1〜3は低級魔法使い、4〜6は中級魔法使い、7〜9は上級魔法使いにそれぞれ区別されています。また低級魔法使いに使えるものは魔力操作と風・火・水・土の四大元素の魔法です。中級になると火を発達させた熱、水を発達させた氷、風を発達させた雷、土を発達させた乾燥といった魔法を使えるようになります。上級になると闇と光属性があつかえるようになります。どうですか?」

「そのとおりです。よく勉強しましたね。おっと、そうこうしているうちに庭に出ましたね。さっそく訓練を始めましょう。」

訓練開始

「ではライト様ではこれを。ライト様の指輪と杖です。」

指輪というのは古代の魔石がうめこまれていて、魔力をあつめるのに必要なもので杖というのは魔力を放つのに必要なものだ。

「あれ?この杖かなり大きい気がするけど。普通このくらいなんですか?」

「ああ。杖は短い杖と長い杖の二種類があつてこれは長い杖のほうです。公爵様いわくブラシア公爵家はだいたいこれだそうです。」

ふーん、そうなんだ。

「さあ、ライト様。この杖と指輪に第一の魔法、契約の魔法記号すなわちあなた魔法名をきざんでください。」

そういつて万能性の魔石をわたされる。魔法記号というのは魔法語を刻むことによって魔法の効果永久的に持続させる技術で契約というのはその初

歩で使い魔や杖、指輪などに刻む。ゆいつ魔力を使わない魔法だ。ついでに魔法名というのは魔法使いがそれぞれ持っているもので一部の魔法を使うのに必要なものだ。以上説明終わり。

「ええっと・・・、

僕の魔法名は何ですか？」

「ああ、サージユです。覚えておいてください。」

俺は杖と指輪

にサージユと魔法語で書き込む。

「これでいいですか？」

「はい。で

は、始めましょう。」

こういうわけで俺の魔法訓練が始まった。

第3話 魔法訓練〜契約（後書き）

ライト君の魔法名はサージユです。覚えておいてくださいね。次回は本格的に魔法訓練が始まります。次回もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2747y/>

スーラシア王国戦記

2011年11月20日03時20分発行